氏　　名	**金　賢鎬　（キム　ヒョンホ）**
学位の種類	博　士　（芸術）
学位記番号	甲第２号
学位授与日	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
論文題目	**現代美術における音とオブジェの相関関係** **「Sound Art を中心に」**
審査委員	主査　教　授　　建　畠　　哲 副査　名誉教授　　本　江　邦　夫 副査　教　授　　石　井　厚　生 副査　教　授　　藤　本　由紀夫

内　容　の　要　旨

現代の造形芸術は絵画や彫刻の固定的で形式的な概念が瓦解し、総体的で複合的な様式へと拡張、変貌して行く趨勢にある。科学の発達によって人間の文明が高度に技術化、産業化していく時代の中で、新たな人間観、世界観が造形的実験を通じ創出されるようになったのだ。

従って現代美術は単純な造形的概念を飛び越え技術的メカニズムに立脚し、積極的にテクノロジーを吸収することになった。同時にダダ運動を前後にして、造形表現の中に文学的内容や音楽的要素である声までが引き入れられるようになり、そのことは後のビデオアート、レーザーアート、コンピューターアート等にまで影響を及ぼしている。

美術は今や物質文明の諸要素を統合する場になったが、これを通じ我々の時代の人間観に対する流れを見ることが出来る。

本論文はそのような多様な流れの中で展開している現代美術の中にも、非可視的対象である音を導入した作品を分析研究する。

本論文第１章では音の特性とコミュニケーションの役割に対する可能性を考察し、第２章では初期未来派が産業化された世界で芸術と日常を接合させ、機械的騒音等を積極的に美術に引き入れた時代的背景と、ベルリンダダ（1918－1923）の音響詩のような視聴覚的造形性を通じ芸術とコミュニケーションへ向かう芸術家達の動き、さらに第二次大戦の以降フルクサスグループのインターメディアに見られる総合芸術的な側面を含めたサウンド・アートの歴史の流れに対する考察と音と言うオブジェの造形的な役割など、第３章はサウンド・アートの代表作家だと言えるジョン・ケージ、タキスそして最近独立的な音響作業をしているビル・フォンタナ、藤本由起夫を通じ現代造形芸術の可能性を探って見た。

そして第４章では現代造形芸術でサウンド・アートが現代美術の流れに及ぼした影響に対し、第５章では制作者としての現代美術に於けるサウンド・アートへの接近を作品制作に於ける心理的背景と制作方法に関係させつつ論述した。